

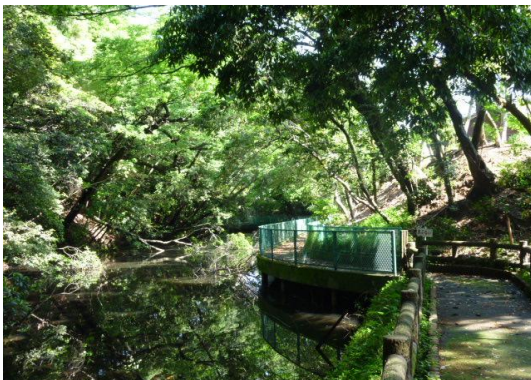
大草城・大野城から寺本城などを見学

5月13日ガイド研修は、大野を中心に大草城跡・大野城・地藏寺・斎年寺・寺本城跡・佐布里城跡を訪ねました。

1 完成はしなかった大草城

阿久比インター前を通り大草へ、隣の地藏寺に車を止めさせていただく。うっそうとした森の中へ入っていくと濠がある、きれいとはいえない水の中に鯉が泳いでいた。次には水のない空堀もあった、そこを通り過ぎると広場があり大勢の人がグランドボールを楽しんでいた。確か以前来た時にも、やはりグランドボールをしていたのを覚えている。広場の隅には天守閣がそびえているが、これはトイレ兼展望台になっている。それにここは緊急避難場所にも指定され今は公園になっている、ここ大草城はどんなお城だったのか。

天正2年(1574)、この地を有していた佐治信方が長嶋一向一揆で戦死し、跡継ぎの佐治一成が幼少だったためか、織田信長の弟織田長益(有楽斎)が知多郡を与えられ、大野城を与えたが、大野城は水利が悪いため大草の地に築城を開始した。しかし、小牧・長久手の戦い後、長益は豊臣秀吉により摂津に所領を移されたため、大草城は完成することなく、未完のまま廃城となった。江戸時代に入ると尾張藩は大草城跡を知多郡の防御上重要な地として、家老の山澄淡路守英龍に大草の地(5000石)を与え、城跡近くに居を構えて城跡の保全をさせ、歴代の山澄氏によって保存されたという。



今も残る濠

現在も本丸、二の丸、三の丸を配し、本丸・二の丸の周囲を濠と土塁で囲った梯郭式縄張りを見ることができる。

※縄張りとは、お城の曲輪や堀、門等の配置をいう。お城の最重要項目でお城の良し悪しはこれで決まるとも言える。曲輪の配置によって分類ができ、大きくは「連郭式」・「円郭式」・「梯郭式」・「輪郭式」・「並郭式」等に分類できる。梯郭式縄張りは、本丸

の虎口に二の丸、二の丸の虎口に三の丸というように、曲輪を連ねることによって防御性を高めた縄張りのこと。

天守閣のような展望台に上ると、伊勢湾を行きかう船や遠く鈴鹿の山並みが浮かび、海が目の前にあることが分かる。

2 本堂より立派な太子堂がある「大草地蔵寺」

大草城跡の隣に大草地蔵寺がある、知多四国霊場 70 番のお寺で正式には「摩尼山 地藏寺」といいます。真言宗のお寺さんで、井戸からあがったお地藏さんが知られています。どうもお地藏さんと言うのは、海や池とか水に関係する場所から現れることが多い。境内に入ると立派な本堂がある、と思ったらそうではなく「太師堂」と看板が掛けられている。太師堂と言うのは「聖徳太子」を祀ったお堂のこと。何故お寺さんに聖徳太子が祀られているのか……。聖徳太子は仏教を厚く敬い保護したため、日本仏教興隆の祖として宗派を問わず信仰されているのだという。しかし、地元のお寺さんをはじめ、これまで見たことがなく知らなかった。



太師堂



本堂

そこから緑の芝が敷き詰められた道を少し下った所にお堂があり、その柱には「本堂」「本尊 地藏菩薩」の二つの看板が掛けられていた。その手前に地藏尊の出現した井戸がある、屋根つきで立派な木枠で蓋がしてある。さらに、お堂の横手には水子供養の地藏さんがそれこそ数千体はあるかと思えるほど、たくさん並び圧巻である。こんなにたくさんのお地藏さんが並ぶお寺さんも見たことがない。そして、お堂の後ろには本尊のお地藏様が安置されていて、周りには千羽鶴がぎっしりと掛けられていた。

このお地蔵さんのいわれはというと、江戸の中期に久米村のお竹さんの夢の中に、「われは竹林の井戸に落ちている地蔵である、われを助け出して井戸を改修するならば、汝の盲目必ず開かん」と告げました。早速お竹さんは井戸から地蔵さんを拾い上げて清水で洗い、七日七夜参籠したところ目が開いたと言われております。評判はたちまち広がりお参りが絶えなくなりました。お地蔵さんに水をかけて、自分の痛いところと同じ場所をなでると治る、と広まり「延命水掛地蔵」と言われるようになりました。



本尊 地藏菩薩



水子供養の地藏さん

境内にはたくさん花や木も植えられており、住職はブログで花だよりも発信していると言う。境内の花は桜、つつじ、しゃくなげ、アジサイ、菩提樹、ききょう、ハマボウ、さるすべり、四季桜、ソテツなど、その中で菩提樹の花は6月に咲くが、花は葉っぱ(葉っぱのようだがこれ自体が花)から直接花芽がでている、ことを教わった。仏様だけでなく、植物のいろいろも教えてくださるお寺さんである。



左は菩提樹の花

3 伊勢湾を見下ろす大野城、でも…

次に大野城へ移動する、155号を走ると高台にお城が見えている。駐車場から階段を上がるが、なかなかの階段で一気には上れない。やっとたどり着くと立派な角櫓(すみやぐら)型の展望台があって、隣の櫓台跡に城主であった佐治氏を祀る佐治神社がある。

この展望台は資料館のようにたくさんの展示がされている、そして、最上階は伊勢湾の眺めがすばらしい。ここからならば敵が攻めてきても容易に発見できたであろう。



天守閣を模した展望台



佐治神社

大野城の歴史について、いただいたパンフレットには次のように説明されている.....観応年間(1350)頃、三河国守護の一色範氏が知多半島に勢力を伸ばし、その子一色範光が伊勢湾を見下ろす地に城を築いたのが始まり。一色氏は大野湊を中心とした伊勢湾の海運を手中に収めたと言われている。しかし、一色氏は將軍足利義政と対立したため三河守護職を失い、応仁の乱を経て次第に勢力を衰退させて、大野城は尾張守護の土岐氏に奪われ、近江出身の家臣佐治宗貞が六万石を領して城主となり、以後、宗貞、為貞、信方、信吉と4代にわたって135年間支配する。大野を中心に知多半島の西海岸地域を治め、伊勢湾海上交通を掌握する佐治水軍を率いていた。

その後、1582(天正10)年本能寺の変後佐治氏は豊臣秀吉に従わず徳川家康に従ったため、小牧・長久手の戦いの合戦後に改易となった。佐治氏のあとには、織田長益(有楽斎)が城主となったが、この城の水利の悪さから大草城を築城して移ったために廃城となった。

大野城の佐治氏は大河ドラマ「お江」で、知られるところとなった。いただいたパンフレットには佐治氏4代は宗貞、為貞、信方、信吉とあるが、調べてみると4代は佐治一成とあり、父信方が織田氏の伊勢長島攻めに参加して戦死。一成は若くして家督を相続し、近江の国小谷城主・浅井長政の娘・江を妻に迎え、後に離縁したと言われている。しかし、一成とお江の婚姻を記録した物は見つかっておらず、はっきりしないとある。

4 徳川家康を二度もかくまった東龍寺

次は内宮御齋宮社、東龍寺、十王堂などを回った。内宮御齋宮社は海岸の堤防前にある、以前一度来たことはあるが忘れていた。要は垂仁天皇の御代に倭姫命が天照皇太神を奉じて、この地に三カ月とどまりその後伊勢参りをした。そこでこの宮は元伊勢と呼ばれ、参詣者が多かったという。そのため、お伊勢さんに向かって本殿は建てられており、簡単にいえばお伊勢さんの遙拝所といえる。



内宮御齋宮社



コンクリート製の梵鐘

次は東龍寺にお参りする、この寺には珍しいコンクリート製の梵鐘が吊り下げられている。本物は戦争で供出し、今になってもそのままにしていることは、お寺さんの意地ではないか、と誰かが言っていた。でも、そんな意地ならいつまでも貫いてもらいたいと思う。「尾張大野散策路 21 東龍寺」の説明板には大変興味あることが書かれている。それは、徳川家康が一度ならず二度もこのお寺にかくまわれたという。初めは桶狭間の戦いで今川義元が討たれた際、岡崎へ逃げ戻るのに一旦この寺に隠れた。そして、二度目は本能寺の変の時に、伊賀越えをして伊勢湾を渡りこの寺に隠れたという。そんな経験をした家康は、後にこの寺に対して感謝の気持ちを表しているのだろうか？ 隠れたことは伝えられているが、家康が感謝の気持ちを表して何かをしたとは伝えられていないのが気になる。

そのすぐ近くに十王堂がある、とても立派なお堂でその前の電柱の隣に「大野町道路元標」が立っている。つまりこの辺りが大野の中心であることが分かる。

5 佐治家の菩提寺「齋年寺」

大野の街を少し散策し、550 円のコーヒー付きランチを済ませて齋年寺へ向かう。

このお寺さんは大野城主二代目佐治為貞が父宗貞の菩提のため建立し、父の法名から「齋年寺」と号したもの。父を敬い開基を宗貞とする、佐治家代々の位牌所である。

13:00 から住職がこの寺の説明をしてくれたが、中でも国宝の雪舟筆の「達磨大師祖慧可断臂図(だるまたいしそえかだんぴず)」について丁寧に話してくれた。ところが、住職が説明しているときに他のグループが入ってきて、一緒に聞いていたのだが、案内人らしき人がぼそぼそと話をしており、お堂の中ではその声がひびいて、説明が聞きづらかった。説明が終わってから法被を着た人に、住職の説明中に話をするとは失礼ではないかと注意した。驚いたことにその人は大野のガイドなのだ、こんなことが分からないようではガイド失格もいいところだ。以前、大野の街を案内してもらった時も、たくさんのお客さんなのにガイドは一人しかつかかなかつたし、話も良く聞き取れなかったのを覚えている。それだけに、今回の態度にはあきれてしまった。



佐治家代々の位牌所「齋年寺」

肝心の達磨の絵についての説明では、この絵は初代大野城主宗貞の三回忌の祈りに、二代為貞より供養品として寄進されたものという。絵そのものは、慧可（えか：達磨の1番弟子）が達磨に弟子入りを懇願する時のエピソードを描いたもので、達磨に自分の心を見透かされて相手にされなかったため、臂(手首)を切り落とし決意を示し弟子入りを願い出ている場面。雪舟 77 歳の作と言う。慧可は達磨を継いで中国禅宗の二祖となった人。

そして、いただいた資料には大野城主佐治家四代についての説明がしっかり載せてあり、四代は佐治与九郎信時(一成)とある。したがって、大草城でもらったパンフレットの信吉は、吉と時のミスプリと思われる。

6 津島社を祀る寺本城跡

次に向かったのは「寺本城」、寺本の名前は村木砦の戦の時に、寺本が今川方に押さえられていたため、信長はどのコースを通過して村木に来たのか、話題となったことでその存在を知っていた。しかし、これまで訪れたことはなく、とても興味があった。

到着したのは寺本駅から 1km ほどにあるスーパー「フィール」の駐車場、隣にはホームセンターのカーマもある住宅街。この寺本について研修部長の説明では、1608 年の備前検地か 1591 年の太閤検地のどちらかの時に、それまで知多郡で一番大きな村であったが、四つに分割されたという。それが、堀之内、平井、中島、回間(はざま)村で、今いるお城跡は堀之内にある。検地の狙いは石高の正確な把握と、それを維持していくための仕組みを変えることにあった。では、どうして村の分割は何のために行われたかだが、江戸時代に知多郡で大きかった村は成岩、乙川、亀崎だった。しかし、これらは分割されなかった、なぜならこの土地は犬山の成瀬家所有(一時は違うが、数多くの村と引き換えに取り戻した)であって、小さく分割することを許さなかった。一方、内海は 11 に分けられたと言う。つまり、権力者の都合で小さくなったり大きくなったと言える。



城跡の広場と津島社

駐車場前の大通りを横切って狭い路地に入っていくと堀之内公民館があり、そこからこれも急な階段を上る。少し上ると頂上に着くが、それでも急な坂は応える年齢になった。上には津島社が祀られているが、他には何もなくて最大幅 40m くらいの細長い地形は長さが 80m ほどか。周りは木が生い茂り眺望はまったく利かず、木々の間から下を見ると急な崖になっていて周りは住宅地だった。緒川城跡も住宅に囲まれていることを思えば、当然のことかもしれないが町の中にお城があったことが何か不思議に思える。

7 二つあった佐布里城

最後は佐布里城跡へ向かう、これまで佐布里城という言葉もあまり聞かなかった。現在の佐布里ダム記念館のある所が城跡で、信濃川（佐布里ロード）東岸の台地の西端に築かれていた。その説明板には「佐分利古城跡」とあり、承久3年(1221)ころに大庭氏が築き、明応7年(1498)頃には平朝臣宗宜が城主であったと記されている。しかし、愛知県中世城館跡調査報告では城主不明とされている。



おもしろいことに説明では佐布里城 A と佐布里城 B が書かれている、どうやら砦のようなものが二か所あったらしい。佐布里城 B は信濃川西岸にあり、城山と呼ばれる丘にあったが今は荒地となって昔の姿をとどめていないという。

今回は大野の街と城跡を巡り、多くのことを知ることができとても有意義であった。これからもこうした企画をぜひお願いした

いものである。

参考

梯郭式縄張り

